

1173（イイナミ）の就職活動日記

全ての就職活動に挑む皆様へ

はじめまして！1173（イイナミ）です。

就職活動、頑張っていますか？

1173が就職活動をした10年前も「就職氷河期」でした。

そんな厳しくも温かい時代に就職活動をできた経験が今の1173を支えてくれています。

少しでも皆様のお役に立つことを願って活動日記をお届けします。

お読みいただければ嬉しいです。

☆ 皆様が1173（イイナミ）に乗り続けてくださいますように ☆

ご感想を是非、ikki1173@yahoo.co.jpまでお送りください。

必ず御礼のお返事を致します。

平成二十三年一月二八日 1173（イイナミ）

目次

『僕』の就職活動日記	四
はじめに	四
迷いのはじまり	八
迷いの中の混乱	一二
ある人がくれた一筋の光	一八
ありのままの自分をもって、いざ就職！	二四
就職活動に取り組む皆へ	三〇

『僕』の就職活動日記

はじめに

今から約2年前、『僕』は就職活動をしていていた。始めてから二ヶ月間くらいは、応募用紙に自分を美化し大きくみせようとする文章を連ね、直前にその会社についての記事をネット検索して頭に詰めこみ面接に向かうということを繰り返していた。(当然、結果はダメつづきだったわけだが：。)

卒業を翌年に控えた『僕』にとって、一つの進路として「就職」という道を選択したことは人生の立派な選択だったし、今でも後悔はしていない。ただ、決めたからには、理屈抜きに、どうしても就職しなくてはならなかった。もちろん、無名よりは有名が良かったし、給料も安いよりは高い方が良かった。だから、あまり興味がない会社でも、「自分をより良く見てもらおう。」「今どんなことに取り

組んでいるのか、きちんと調べてから面接に
臨もう。」と当然考えたし、思い入れのない言
葉を並べたりもした。
会社のことなんて詳細は働いている社員で
すら分からないもので、「エー、〇〇とうちの
会社提携するんだ！」「うちの会社ってこんな
事業もやっていたんだ。」と新聞やニュースを
見て初めて知ることも多い。ただ、初めて会
社に来る学生と違うのは、何を生業として事
業を行っているか、それを身に染みて理解し
ているという点だと『僕』は思う。自動車会
社であれば自動車を作ることが生業だし、出
版社だったら出版物を発行することが生業で
ある。当たり前前のことだが、とても重要なこ
とで、実は新米である『僕』も頭では理解は
しているのだが身にしみる程に実感できては
いない。
本当に理解しなくちゃならないことを理解
できていないとき、人間は誰だって不安にな
る。不安になるから、いつも出来ていたこと

が出来なくなるし、虚勢を張って自分を大きく見せようと自分にウソをつく。折角、「あなたのことをこんなに好きだから、何とかしてそれを伝えたい」と思っているんです。」という素直で謙虚で可愛らしくさえ見える、その姿が、一変して、胡散臭い腰の曲がった詐欺師のようにさえ見えてしまうのはそんな時で、もう一度、「今度は本当の自分を見せますから。」といっても、もう後の祭りとなってしまう。

『僕』もそんな悪い循環に自らはまり込んでしまい、就職活動の始め二ヶ月間は、ごく苦しい時間を過ごした。終いには、「こんなにあなたの会社のことを良く思っているのに、どうして分かってくれないのだろう。」と、全く自分を見失ってしまったこともある。それでも、「就職」という道を選択したのだからと、どんどん痩せてゆく体を引きずるようにして会社を回った。沢山の人に出会い、色々なことを学び、本当に大切なことに気付いた。

そんな就職活動を経て、『僕』は今ある□□
飲料メーカーに勤めている。後悔はなく、あ
るのは向こう側に見える自分への挑戦のみで
ある。

『僕』は、あの就職活動があったからこそ、
今の『僕』がいると実感しているし、これか
ら就職活動を迎える学生の皆にも、意義のあ
る活動をやリ遂げてもらいたいと願っている。
そんな『僕』からのメッセージが皆に伝わ
り、皆が、「等身大の自分」と「自分の向こう
側に見える世界」を持って社会に飛び出し、
いつか共に、何か新しいことへ挑戦していっ
てくれることを信じ、少し恥ずかしいけれど、
当時の『僕』の就職活動の記憶を手繰ってゆ
くことにする。

迷いはじまり

『僕』が就職活動をスタートしたのは、大学三年生の一月だった。マスコミという響きに憧れ、テレビ・ラジオ・広告代理店、時間の許す限り受けられるものは全て受けていた。行きたいと思っていたテレビ局を何個か落ちてゆくうちに、憧れは執着にかわり、自分自身を見失わせていた。どうして、テレビ局なの、どうしてラジオなの、どうして広告代理店なの、そんな事はもはやどうでも良く、ただどこかのマスコミといわれる会社に入れれば良い、そんなふうにか考えられなくなっってしまった。

○×テレビ局の面接では、『僕』は「面白い奴」を演じようとした。胸には名札をつけ、面接官の質問には、そのテレビ局によく出てくるお笑い芸人の一生懸命風なしゃべり方を真似て答えた。会場にて面接の直前に書かされた履歴書には、尊敬できる人の欄には双子

のオカマの名前を書き、ゼミの発表会で少しうまくいったことを、さも大きなウケを取ったように誇張して書きもした。途中までうまくいっていたように思えた（当然、「思えた」だけで、その実、面接官は可愛そうな学生に付き合ってくれていただけなのだ）その面接も、

「ゼミの発表会にて、まじめな発表の中で笑いを取れたことが印象深い出来事だったって書いてあるけれど、ちよつと話してみてくれる？」

「……」

ここで、あっけなく終了してしまった。

□×テレビ局を受けたとき『僕』は、「今度は正直さをアピールしよう！」と決意して面接に臨んだ。

「他に受けている業界はあるの？」

「ハイ、広告代理店やラジオ局を受けています。」

「でも、マスコミだけなんだよね。」

「イエエ、不動産業や製造業にも興味があるので、受けようと思っっています。」

そう答えたときの面接官のビクリした顔を思い出すと、今となっては思わず笑いがこみ上げてきてしまう。

もう一つ、△×ラジオ局を受けた時のこと、

「君は好きな番組の欄にラジオの番組しか書いていないけれど、テレビとかで好きな番組はないの？」

「イエエ、私は最近ほとんどラジオしか聞きませんから。」

「へえー、ラジオしか聞かないの。」

そう、「正直だけではダメなんだ。少し大げさに言っても一途さをアピールしなくては！」、本気でそう考えて、受け答えをしていたのである。

今となっては、信じられないような一連の『僕』の行動だが、当時はそれは真剣に取り組んでいた。本当に捉えておくべきことは何であるのか、本当に相手に伝えなくてはなら

ないことは何であるのか、全く考えようとせず、とにかくマスコミと呼ばれる会社に入りたい、入れるためのウソの自分を作り上げなくてはいけない、それだけに執着していた。「今回の会社ではこうやってしまったから失敗したんだから、次回の会社ではこうしてみよう。」、そんな事を繰り返してゆくうちに、『僕』は迷路に迷い込んでしまっていた。どうにかして、気に入ってもらおうと小細工をすればするほど、会社の門は重く、冷たいものへと変わってゆくように思えた。

迷いの中の混乱

へこんなな会社に会社のことを調べて、面接の人に気に入ってもらえるように受け答えをしているハズなのに、どうしてもして会社に入れないの
だろう。なんで自分の一生懸命さを分かってくれないのだろう。〴〵

へやっぱり、大学でラグビー部のキャプテンをやっていたり、芥川賞を受賞していたり、その会社でインターン（就職活動の一環として一定期間、自分の希望する業務に携わること）したりしていないとダメなんだ。〴〵

へこんなことになるんだったら、もっとアピールできるように会計士の資格とか、英語とか中国語の検定を取っておくべきだった。〴〵
こんな何の意味もない自問自答を繰り返す日々が一ヶ月以上続いた。『僕』の体重は、五キロ以上減っていた。体重と共に、マスコミへの憧れも執着も『僕』の中から削げ落ち、ただ「どこでもいいから早く就職しなくては。」

という強迫観念だけに取りつかれ、有名な会社であれば、どこでも受けに行った。そして、落ち続けた。

そんな時『僕』は、自分を見失い友人を傷つけてしまうことになる。

痩せてフラフラしている『僕』を見かねて、仲の良い友人が、一緒にOBに会いに行こうと誘ってくれた。

「とても気さくな先輩だから、会社の社員としてっていうより、学校の先輩として、色々アドバイスをしてくれうと思うんだ。ご飯も食べさせてくれるから、一緒に行こうよ！」

友人の思いやりの込められた言葉は、もちろん『僕』の頭に入っているはずもなく、「就職に繋がるかも、イヤ、繋げなくちゃ！気に入ってもらえるようにしなくちゃダメだ。」、そんなことだけが頭の中をグルグルと回っていた。そして夕方、指定された学校近くのキ

ツチン・バーに友人と共に行き、そのOBが来るのを待っていた。十分ぐらいして、そのOBは店員に案内されて僕らの座っている席にやって来た。短くも長くもない髪を七・三に分け、細い眼鏡をかけている。痩せ型で細目の三十歳手前くらいの男性である。

「遅くなって、申し訳ない。仕事が中々終わらなくてさ。先に食べていてくれれば良かったのに。」

そう言うと席に座り、案内してきた店員に向かって、手際良く全員分の注文をした。運ばれてきた生ビールで乾杯をした後、そのOBは『僕』に簡単に自己紹介をした。

「〇〇不動産会社に勤めているAです。卒業したのは七年前で、学部は商学部。今はデイベロツパーとして都市開発に携わっています。」

多分、そのAサンは自分の就職活動のことや今、自分が取り組んでいる仕事のことなどを親切に語ってくれていた。『僕』は本来であ

れば、どちらかというど苦手な、お互いに理解し合うまでに少し時間を必要とするであろうタイプである、そのAさんの、細い眼鏡の奥の細い目をしっかりと見返しながらも、話しに思いの込められていない相槌や愛想笑いを返していた。『僕』が発した言葉は、そのAさんの話の内容に関わりなく、「不動産関係の仕事にとっても興味があり、是非あなたの会社に入社したいと思っています。」というものばかりであった。

結局、『僕』の臨んでいた「就職に繋がるような話し」はなく（「ない」と感じたのは「就職」というものに近視眼的になっていた『僕』自身のせいであり、そのAさんの話の中には、就職活動はもちろん、就職した後の自分の道の選択の指標となるような沢山のヒントやメッセージが込められていたであろうことはいうまでもない）、お店を出た。お店の前で、一通りお礼と挨拶を交わした後、そのAさんは、「色々と大変だと思っうけれど頑張ってね。」

また何か相談事があつたら、いつでもメールでも電話でもしてくれてかまわないから。」

と言つてタクシーで帰つていった。友人と2人で駅への道を歩きながら、『僕』は悶々としていた。そして、そんな自分お気持ちを抑えきれなかつた。

「なんだか、偉そうな人だつたな。開発するのに法律が障害するなら変えちゃえば良いんだ、とか言っちゃつて、傲慢な印象を受けたな。ああいう人が一人でもいる会社は入りたくないね。だいたいなんだよ、あの細かい目はさ……。」

そんな『僕』の言葉に友人は何も言おうとはせず、ただ、悲しそうな顔を『僕』に向けてただけであつた。そんな友人の顔を見るのは初めてで、続けて何かしゃべろうとしていた『僕』は、それ以上何もしゃべることが出来なかつた。下を向きながら二人、黙々と歩き、駅について別れ際、友人がポツリとつぶやいた。

「先輩に謝らなくちゃ。」

『僕』は、何か堅いもので頭を叩かれたよ
うなショックを受けた。「就職しなくては」と
いう脅迫観念は、「人の話をきちんと受け止め、
理解し、自分の考えを述べる。」という普通の
会話をすることさえ出来ない上に、自己防衛
の為に人を否定するという、「とんでもなく失
礼で、どうしようもない奴」に変えてしまっ
ていた。そして、仲の良い友人の親切さえも
アダで返し、傷つけてしまった。もう、どう
したら良いのか分からなかった。

抜け道のない迷路の中で『僕』は方向感覚を
失い混乱していた。

ある人がくれた一筋の光

何にも考えられないうでいた。「就職」という二文字は、『僕』自身を失わせていた。いったい何が本当の自分であるのか、分からなくなっていた。その場しのぎのウソの自分を作り人と会い、その度にボロボロとその脆い仮面を剥がされて、何の取り柄もない『僕』を露呈するようだった。小さな小さな『僕』を人に知られるのがイヤで、相手が何をしゃべっているかなんてお構いなしに、ただただ虚偽の自分を相手に押し付けていた。会話能力でさえ、消えてしまっていたようだった。

そんな時『僕』は、ある人から一筋の光をもらうことになる。

『僕』は今、その人の名前も覚えていないし、顔もぼんやりとしか思い出せない。小さなゲームソフト制作会社に勤めているとい

う、その人に会うとき、『僕』はその会社に就職したいとも思わなかったし、なのでその人に気に入ってもらおうとも思っていなかった。たまたま時間の空いていたその日に、たまたま何気なくインターネットで名前と連絡先だけ記入し申しこんでいたその人の会社から連絡があり、何もしないでいるよりはマシだと会うことにしただけだった。

待ち合わせ場所の喫茶店で待っているとスーツではなく、チノパンにネルシャツといったラフな格好をして、無精ひげを生やしたその人がやってきた。スーツ姿で両手を膝の上において待っている『僕』を見つけると、

「やあ。」

と大きな声で手を挙げながらズカズカと歩いてきて、テーブルについた。一通り自己紹介を終えると、アイスコーヒーに砂糖とたっぷりのミルクを入れながら、その人は言った。

「就職活動って大変だろう。」

「イエ、そんな事ないです。」

「イイエ、っていったって、結構来てるぞ。」
まばらにヒゲの生えた頬をさすりながら、
その人は子供っぽく笑った。初めてしつかり
と見たその人の目は大きく、包み込まれるよ
うな感覚に襲われた。純粋に、普段その人が
どんな仕事をしているのか知りたくなかった。
それでも『僕』は何となく言い出せないでい
た。
「とてもラフな格好なんですネ。」
「おう、別に格好で仕事するわけじゃない
からな。俺、スーツって馴染めなくてさ。そ
うそう、就職活動ってやつ俺もしたけどさ、
銀行とか受けたけど、ダメだったな。会社の
人の、あの七・三分けがダメだったよ。見た
だけで笑っちゃってさ。だから、今の仕事っ
て、俺に合ってるんだと思うんだよな。ああ、
まだ俺が何の仕事をしているか話してなかつ
たな。興味ないかもしれないけど、聞いてく
れるかい。」

「ハイ、是非お願いします。」

入社三年目にして初めて自分の企画書が通り、ゲームソフトの編集にあたったこと、ゲームの中に登場するキャラクターを作り上げてゆくまで何度もイラストレーターの人とぶつかり悩みぬいたこと、締め切りギリギリになってもゲームソフトが完成せず、会社に泊まりこんで作業にあたったこと、ゲームが漫画化され子供達からキャラクターの名前で呼ばれ、握手やサインを求められたりするところを、時に熱っぽく、時に恥ずかしそうにとても楽しそうに、その人は『僕』に話してくれた。

「それでね、俺が一番大切にしているのは、いつも決して忘れないようにしてんのは、誰に何を伝えたくて何を作るのか、っていうことなんだよな。たった一人でも何かを伝えたい相手がいればそれで良いと思う。逆に一人も伝えたい相手がいないで生まれた作品なんて、だれ一人として認めちゃくれないさ。その一人にどうやって自分の思いを伝えるのか、

俺の場合は、それが今はゲームソフトっていうわけだな。」

「ゲームが好きだったんですか。」

「全然。どっちかっていったら苦手だったよ。ロールプレイゲームなんて一時間もやれば、飽きていたしさ。ただ、子供は好きだったから、子供達に何かメッセージを伝えられたら良いなあって漠然と考えてたくらいだな。皆と一緒に就職活動始めて、皆と一緒にの所を受けて、どこも自分にはあわないなあって感じていたときに、なんとなく今の会社を受けて、自分のこと全部正直に話したら、意気投合しちゃってさ。ゲーム苦手です、って言ったらさ、ゲームを嫌いな人でも楽しめるソフトを君なら作れるんじゃないか、って。そんな感じで今に至るわけだ。」

一つ一つの言葉が『僕』の心に優しく響いてくるようであった。格好も、仕草も何一つ飾ることのない、その人の口から発せられる思いの込められた言葉だったからこそ、『僕』

は、取りつかれていた「就職」という言葉を
忘れ、素直にその人の言葉に耳を傾けること
が出来た。
「きっと、どこかで一緒に仕事をするとき
もあるさ。その時はよろしくな。」
そういって、『僕』と握手をして、その人は
帰っていった。
帰り道の途中『僕』は、今まで、何をして
いるときだったら辛いことでも楽しく、熱っ
ぽく取り組んで来られたんだろう、とずっと
考えていた。ウソの自分をどうやって作り出
そうかとばかり考えていた時とは全く違い、
何だかすごく落ち着いた気持だった。
その時確かに『僕』は一筋の光をその人から
受け取っていた。

ありのままの自分をもって、いざ就職！

やっぱり『僕』は、就職するつもりだったし、どこかに就職しなくてはと、焦っていた。これ以上、親にお金を出してもらって勉強を続ける気もなかったし、大学を卒業したら、会社に就職することはずっと決めていたことだった。そのくせ、それぞれの会社のことを良く理解しているわけではなく、会社の仕組みも分からないままだった。ただ、今までと違っていたことは、
へ良く分からない会社に自分を合わせようとするのではなく、ありのままの自分を受け止めてくれる会社を探そう。と、決意していたことであった。『僕』は、皆で何か一つのことを達成することが、とても楽しく、そういうことを成し遂げた後には、なぜか分からないけれど、とても充実感を感じていた。

高校のとき『僕』は水球をやっていた。別

にキャプテンではなかったし、試合に出られないときも多くあったけれど、全員で気持ちの入った練習をしたかったから、授業が終われば、誰よりも早くプールに行ってボールに空気を入れていた。勝つために皆で意見を言い合いながら練習メニューを組み、生活面でも気を付け合い、時にくじけそうになるところを支え、支えられながら、試合に臨んでいる。その時が一番、充実しているときであった。幾つかのチームに分かれて、文化祭での発表に向けて論文を書いているときも、やっぱり第一に考えていたのは、とにかくメンバー全員の思いの入っている論文を完成させよう、ということだった。何人もで一つのことに向かって作業をするときに、全員が全員とも同じようにやる気をもって取り組むということは、とても難しいことであった。個々によって、そのテーマに対する興味の高合いも違うし、知識のレベルにも差があって、放っておくと

どんどんとバラバラになっていってしまいう。
『僕』はなぜか、そうなってしまうのがいや
で、どうしても、たった一行でも、二行でも
良いから、全員の気持が込められた作品を作
りたかった。やる気を無くしてしまっている
のかなと思つたメンバーには、そのメンバ―
が興味のあるありそうで論文のテーマに関連する
本を探しだし、大体の内容をまとめたものを
付けて渡したりもした。結局、そのメンバ―
から提出された文章は割り当てられた枚数よ
りも大分、少ないものだったけれど、それで
も『僕』はとても嬉しかつた。出来あがつた
論文は、多少ちぐはぐなものになつてしまつ
たけれど、そんな事はどうでも良く、全員の
思い入れのある論文が出来たことが誇らしか
つた。
どうして『僕』は関わる人、全ての思いと
共に何かを達成することに、充実を感じるの
であろうか。それは、『僕』自身にもハッキリ
とは分からないでいた。ただ一つ言えるとし

たら、多くの人の理解や共感を得ながら進められた目標こそ、きっと達成するものであると、心のどこかで確信していた（今でも確信している）ということである。

友人の勧めや、以前本でその会社のことを呼んでいたこともあり、□□飲料メーカーを『僕』は受けた。本で読んだといっても、「すごく元気の良い会社なんだなあ。社員が皆自社の製品を愛しているところには共感が持てるなあ。」くらいであったので、良く分からなかった。友人も、なんとなく『僕』の雰囲気とその会社が合ってるような気がする、ということだけで勧めただけであった。

『僕』は出きる限り、ありのままの自分を表現しようとした。高校の時のこと、大学のこと、自分が何をしているときだったら、たとえ辛くても、悲しいことがあっても、楽しく、前向きに取り組むことが出来るのか、充実した気持ちになれるのか、懸命に話していた。そんな『僕』の言うことをその女性の面接官

はだまって聞いていた。そして、『僕』の話しが終わった後、「じゃあさ。」といつて一つの質問をした。

「あなたは、この会社で、どんな自分を達成してゆきたいの。」

それまで就職という強迫観念に取りつかれ、やっと這うようにして、そこから抜け出してきた『僕』にとって、会社に入った後のことなんて考えられる余裕も無く、現在までの自分を会社の人に分かってもらえれば、それでいいと面接に臨んでいた。言葉に詰まってしまった『僕』は、少しうっむいて、もう一度、その女性の言葉を頭で繰り返した後、ゆっくりと、そしてしっかりと自分の気持を言葉にした。

「沢山の人の思い入れと共に、物事を達成しようとして一つのことに挑戦してきたことは、きっと思いがあれば必ず目標は達成できるといふ信念が私の中にあつたからだと思えますし、その気持は今でも変わりません。飲

料という分野の中で、物作りをし、長く愛される商品を出そうと挑戦を続けられているこの会社で、自分ならば、そこには沢山の困難が待ちうけているとは思われますが、社員全員の思い入れのある商品を開発し、多くの人々に伝えてゆくことが出来ると思います。そうして、一つ一つのことには責任と思い入れをもって取り組み、達成した後には、きつと成長した自分がいるのだと信じています。」

『僕』の生意気な答えを聞いていたその女性には、少し微笑み、大きな目で『僕』を見つめ返しながら、優しい声で言った。

「きつと、あなたの向こう側に見える世界がこの会社にはあると思うわよ。」

そして『僕』は今□□飲料メーカーで働いている。

就職活動に取り組む皆へ

とても苦しかった就職活動を終え、『僕』は今社会人二年目として何とか日々過ごしている。怒られたことは数知れないし、何度も何度めめげてしまいそうになった。それでも、しっかりと自分の目標を見据え、新しいことへ挑戦してゆく気概を忘れないでいられるのは、悩みに悩んだ就職活動があったからこそだと思っている。

二ヶ月も悩んだ結果がへ自分がどんなことならば楽しんで取り組むことが出来るのかを自分自身でしっかりと理解して面接に臨むこと。)

であるということに皆は、なんだそんなこと、と思うかもしれない。いつも一緒にいる友人であれば簡単に出来ることである。お互いの強い所も弱い所も、知り尽くしている仲であるから、今更、何を気取ることもない。しかし、素敵な異性に初めて出会い、何とか

して自分に興味を持ってもらいたいと思ったとき、正直な自分をさらけ出すことは難しく、大抵の人は、少なからずウソの自分を作り上げようとするだろう。そんな時はきっと、うまくゆかないはずだ。

一つの会社の面接は全部合計しても、長くても三〇分くらいなものである。その短い出会いの中で、会社は『僕ら』を理解しようとするし、『僕ら』は会社を理解しようとする。真剣勝負である。そんな中で、ウソの仮面をかぶって話しをしている人間を会社は決して信用しない。これからの会社を背負い支えてゆくであろう人間をそのような中に探そうとはしない。やはり、「等身大の自分」をしっかりと認識し表現することが大切なのである。そして、「等身大の自分」をしっかりと理解できているからこそ、次に「自分の向こう側に見える世界」に向かって歩を進めてゆくことが出来るのである。

『僕』は結局最後まで、この業界にどうし

でも入ろうという決意を持ってないまま、今の会社に入ることを決めた。『僕』を素直に表現してゆくことで精一杯であり、会社の仕組みや世の中の仕組みなど、良く理解していなかった。(今でさえ、全てを理解できないでいるのだから、当然のことなのだ。)そんな『僕』を正面から受け止めてくれた今の会社と出会えたことは、本当に幸運であった。そして、これは「縁」というものであると思う。これはあくまで『僕』の経験であり、皆には皆の経験、結果が待っているはずである。自分をありのままに表現することが出来たならば、「縁」のある会社が皆を待っている。「縁」で結ばれたお互いが出会ったとき、お互いの新しい世界は必ず開かれる。

社会にでる一つのスタート地点である就職活動を大いに楽しんでもらいたい。悩み、つまずいてしまうこともあるかもしれない。たとえそうであっても、その苦しさと真正面からぶつかり、どんな簡単なことでも、幼稚な

ことでも、自分なりの答えを一つ見出すことが出来れば、それは一生のかけがえない宝物になるはずである。

それでも、道を見失い、どうしようもなくなってしまう時に、たかだか少し年上なだけの『僕』の話しが、皆の役に立てばこれほど嬉しいことはない。

みんな 就職活動 頑張れ！

ご感想を是非、ikkiki1173@yahoo.co.jp

までお送りください。

必ず御礼のお返事を致します。

平成二三年一月二八日 1173 (イイナミ)